

# 令和5年度 都市経済常任委員会行政視察報告書

## 1 参加委員

(委員長) 小川裕暉 (副委員長) 長谷川由美  
(委員) 滝口友美 (委員) 加藤大嗣 (委員) 藤本恵祐 (委員) 山口順平 (委員) 杉本啓子

## 2 視察日時

令和5年11月13日(月曜日) 午後1時30分から午後4時まで

## 3 視察先

青森県八戸市

## 4 視察事項

(1) 八戸ポータルミュージアム(はっち)について

## 5 視察概要

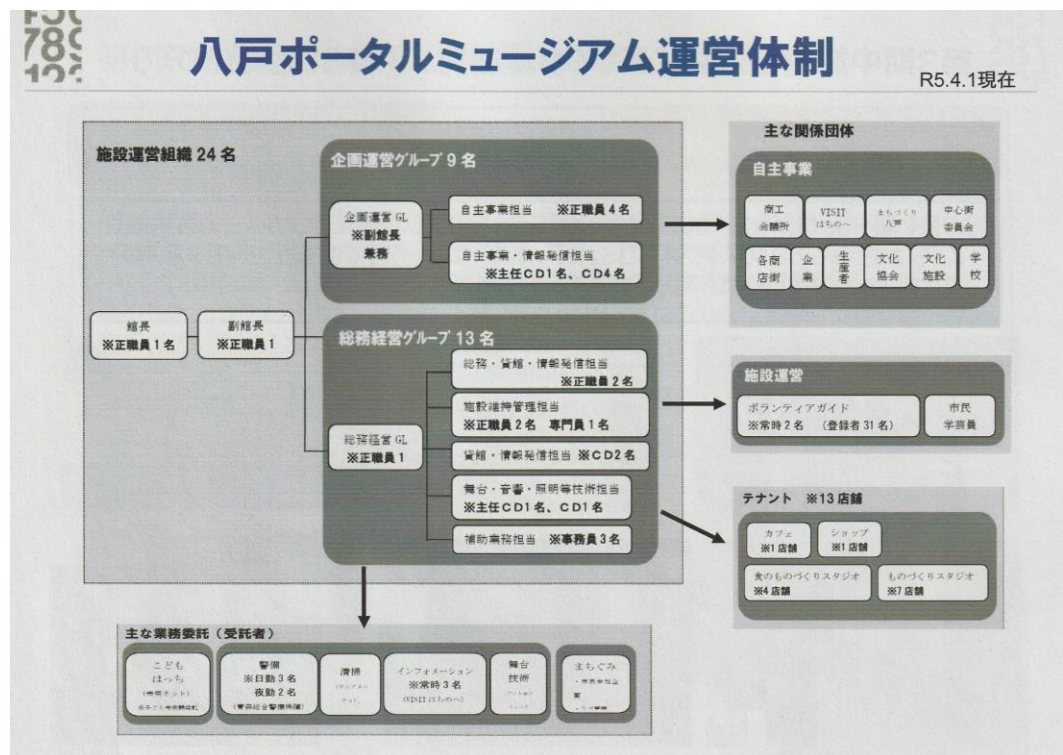
	(担当 藤本恵祐)
視察先選定理由	<p>八戸市では、地域活性化や観光振興、市民交流の促進等を目的として「八戸ポータルミュージアム(はっち)」を市内中心部に開設し、市直営で運営してきた。</p> <p>同ミュージアムでの取り組みは、本委員会の政策提言テーマである「茅ヶ崎らしいツーリズム」について調査・研究を深めるうえで、多くの街の魅力や観光資源等を有する本市が、市民等と協働しつつその魅力や資源をいかに効果的に発信して行くかという点において、貴重なヒントを得ることができると考えた。</p>
内 容	<p>1 事業及び施設概要</p> <p>八戸市中心市街地の衰退に歯止めを掛けて活性化を図るべく、文化観光交流施設として「八戸ポータルミュージアム(通称:はっち)」を建設(平成23年2月開館)</p> <p>→鉄筋コンクリート、地上5階建て</p> <p>→国庫補助、合併特例債等を活用して建設(総費用約40億円)</p> <p>(1) 新たな「交流」と「創造」の拠点</p> <p>→各種市民活動を支えるスペース&amp;スタッフの確保</p> <p>→ものづくりスタジオ(工房兼ショップ)の提供(月額2万円、3年期限)</p> <p>(2) 賑わいの創出</p> <p>→季節感溢れるイベント、カフェの開催</p> <p>→市外アーティストのアートプログラムによる地域資源の再発見</p> <p>(3) 観光と地域文化の振興</p> <p>→市内観光スポットに誘う入口(ポータル)</p> <p>→市民作家・学芸員の芸術作品や工芸品等を展示</p>

## 2 効果、推移

- (1) 中心市街地における民間開発の動き（商業ビル、マンション等）
- (2) 入館者数1,000万人突破（令和5年4月）  
→年間来館者数約82万人（コロナ前のR1年度実績、当初目標＝65万人）
- (3) 施設利用件数はR1年度＝3,663件、R2年度＝2,681件、R3年度＝2,374件とコロナ禍で低減したが、R4年度は2,724件と持ち直しの向に
- (4) 新しい市民活動・文化創造支援、シティプロモーションに貢献  
→令和元年度までの視察件数＝1,172件

## 3 課題（委員会としての所見）

- (1) 開館以降、指定管理等を受任できる民間事業者や団体が存在しなかったため、現在も正規職員と会計年度任用職員（計24名）による直営管理（商工労働まちづくり部）、となっており、今後は運営の更なる効率化や民間委託等のスキーム検討が必要。
- (2) コロナ禍で来館者や利用者が一時的に減少したが、アートイベント等の積極的な実施により、インバウンド需要を含めた回復、増加トレンドに繋げる必要がある。



【運営体制図～受領資料より抜粋】

#### 4 今後の方向性

第3期中期運営方針（2021年～2030年）に基づく事業展開を実施

##### (1) 文化とアートへの貢献

→パフォーミングアーツを中心とした発表・鑑賞、参加・体験、創造等のプログラムを展開し、中心街の賑わい創出と文化芸術の振興を図る。

##### (2) 経済と観光への貢献

→中心街の魅力向上や生産者、飲食店、個店等の支援を目的としたテーマ性のあるマーケットの開催やマチニワでのイベント支援を実施する。

→観光情報発信強化のための観光展示の計画的な見直しや、ボランティアガイド等と協力して、八戸の魅力を発信する。

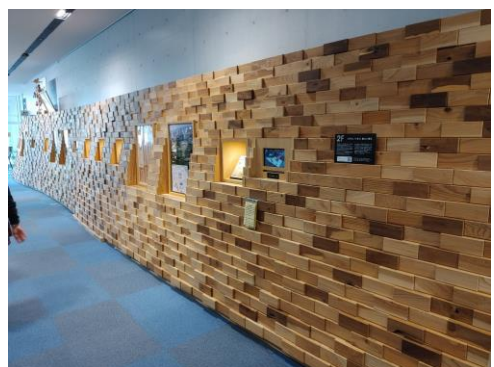
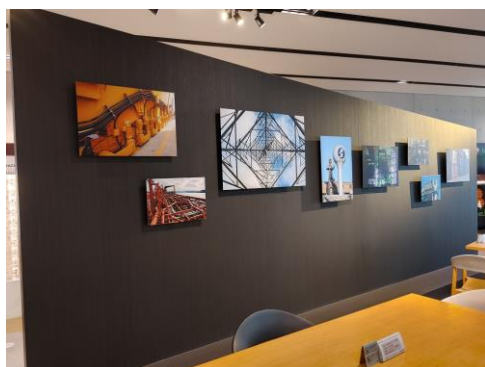
##### (3) 暮らしと拠点づくりへの貢献

→より良い暮らしと豊かなローカリティの再発見をテーマとした「暮らし学アカデミー」や「こどもはっち」「ものづくりスタジオ」など、子育てやコミュニティビジネスのインキュベーション等、様々な市民活動を支える拠点づくりに取り組む。

#### 【館内の様子】



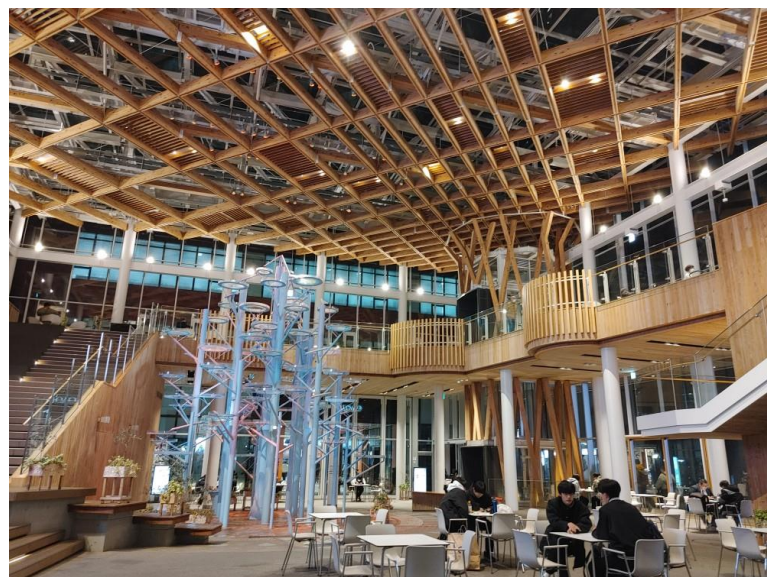
ものづくりスタジオの出店例～起業支援の側面も持つ



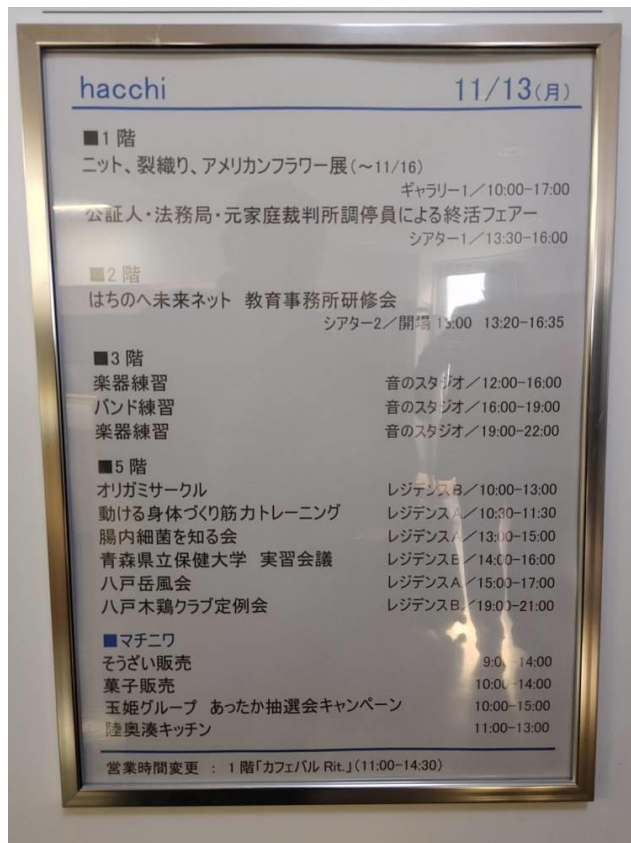
地場産業をPRするスペース



芸術・文化・歴史を PR するスペース



「はっち」の道向かいに開設された多目的広場（ホール）の「マチニワ」  
両施設一体となった活用を展開



視察当日の施設利用予約状況

考察

1 本市との比較

本市では、以前の八戸市のような市街地中心部の衰退現象は見られないものの、市内に散在する産業、観光、歴史、文化資源等の情報を市内外に一元的に情報発信し、かつプレ鑑賞・体験や起業トライアル等が可能な施設または仕組み（デジタルアーカイブ等）があっても良いのではないかと考える。

その観点で、市民協働を踏まえた「はっち」のコンセプトと運営手法は大いに参考となる。

2 本市での展開の可能性

例えば東横 INN 茅ヶ崎市役所 1F のコミュニティスペースや道の駅「湘南ちがさき」等で「はっち」の成功要素を取り込み、「茅ヶ崎らしいツーリズム」の実現に資するハブにできないか一考に値すると考える。

備考

参考資料（八戸市提供資料）

- (1) 八戸ポータルミュージアム「はっち」のあらまし（2023.4 版）
- (2) 八戸まちなか広場「マチニワ」のあらまし（2023.4 版）
- (3) Hacchi（冊子）
- (4) マチニワ（パンフレット）
- (5) hacchi フロアガイド

# 令和5年度 都市経済常任委員会行政視察報告書

## 1 参加委員

(委員長) 小川裕暉 (副委員長) 長谷川由美  
(委員) 滝口友美 (委員) 加藤大嗣 (委員) 藤本恵祐 (委員) 山口順平 (委員) 杉本啓子

## 2 視察日時

令和5年11月14日(火曜日) 午後1時20分から午後3時00分まで

## 3 視察先

栃木県宇都宮市

## 4 視察事項

- (1) 道の駅うつのみや ろまんちっく村について
- (2) 他の観光事業について

## 5 視察概要

	(担当 山口順平)
視察先選定理由	令和7年度に道の駅ちがさきの設立が予定されており、「茅ヶ崎らしいツーリズム」のあり方を都市経済常任委員会として研究テーマとしている。 その中で宇都宮市は、ろまんちっく村を平成8年にオープンし、平成24年には市内初の道の駅としてリニューアルオープンしている。当該施設を核とした宇都宮市の観光施策および管理運営を委託したファーマーズフォレスト社の取り組みについて視察を行うことで深い理解を行うことが必要であると考え、視察先として選定した。
内 容	1 宇都宮市の観光振興および道の駅うつのみや ろまんちっく村について 宇都宮市 経済部観光交流課観光企画グループ 総括 滝田様 (1) 市の特徴 宇都宮市 51.86万人 栃木県の県庁所在地であり、北関東最大の都市 栃木県の政治・経済・文化・ビジネスの中心地であり、令和4年11月に北関東初の会議中心型コンベンション施設「ライトキューブ宇都宮」開設 JR宇都宮駅と商業施設や学校、工業団地を結ぶ新設のLRT「ライトライン」開業 主要観光地の大谷地域における観光・周遊拠点施設「大谷コネクト」開始 (2) 市の観光資源・取組について 餃子、カクテル、ジャズ、石の里大谷、ジャパンカップサイクルロードレース、バスケット3×3などプロスポーツなど 宇都宮観光コンベンション協会を中心とした各団体の連携・協力を進めることで、交流・関係人口を増やし、ひいては再来訪や移住定住、地域経済の活性化につながる

るようオール宇都宮で取り組んでいる

(3)「道の駅うつのみや ろまんちっく村」について

もともとは農林公園構想からスタートし、条例を制定。当初整備費 148 億 7200 万円。平成 8～19 年は第 3 セクターによる管理運営で、市職員を派遣していた。長引く景気の低迷、利用者ニーズの多角化により質のサービスが求められる中、指定管理者委託に切り替え、平成 20 年からファーマーズフォレスト社による運営が開始。平成 24 年には道の駅として登録し、駐車場を 24 時間開放する形で改修を行い、情報コーナーを充実させるなどの変遷をたどってきた。

2 ファーマーズフォレスト社、ろまんちっく村の運営について

株式会社ファーマーズフォレスト 総務広報・OMO戦略事業部 鷹箸様

(1) ファーマーズフォレスト会社概要

平成 19 年設立し、農業と食、地域資源を結ぶ総合プロデューサー・地域商社を行っている。麦・ホップの栽培からビールへの加工、販売までを行う 6 次産業化の構築、今までの販路だけではない直売所やフードコート、都内への販路など販路の選択肢を増やすことによる地域商社としての役割、りんごをリンゴジュースへ加工し、マーケットに認められるものを新たな地域特産品とする地域プロデュース事業などを行っている。「トチギフト」としてただもの売るだけでなく、生産者のストーリーと一緒に届けたり、体験型ツアーを行うことで食と農業の教育の場とすることで、地元生産農家のリピートを高める取組も行っている。

(2) ろまんちっく村の運営について

現在は 120 名で運営し、障がい者雇用 3 名から 4 名。来場者は年間 140 万人を推移。道の駅こそコンパクトシティの核となる場所、地域課題を解決する場所、インフラ拠点、地域交流の創造拠点、地域素材を活用した 6 次産業化拠点、着地型観光等の発着拠点、他産業との結節点、情報発信と出口戦略の拠点となる。

特筆すべき取り組みとしては、地域で無くなりかけている盆踊りなどのイベントを町内会に代わり、継承する役割にもなっている。

着地型観光としては、普段旅行客が行けないような、生産者のお宅に訪問するような機会を作り、さらにファンになってもらう取組を行っている。集客を目的ではなく、リピートするファン作りのためのツールとして活用している。

着地型観光の代表例となる大谷アンダーグラウンドツアーは 10 年経った今も応募開始するとすぐに埋まってしまう人気のツアーとなっている。かつては石材採掘で賑わった地域だが、地域衰退が進みごみの不法投棄が問題となった。ごみ掃除から始め、その魅力を探した結果、水温が夏でも 5～6 度ということがわかった。その特性を活かし夏場でもいちごを作ることができる場として、実証実験を行い、最近「大谷なついちご」として出荷できる商品になった。

このような地域の課題解決から地域再活性化につなげる取組を行っている。

<p>考 察</p>	<p>上記の内容を伺って感じた点・考察</p> <p>(1) 宇都宮市とファーマーズフォレスト社の関係性</p> <p>今回の視察における対応からも、日頃の運営や課題についても共有を行いながら二人三脚で進めている印象で、良好な関係であることが伺えた。また、指定管理者に任せるだけではなく、状況把握に努める宇都宮市の様子が伺えた。</p> <p>(2) 宇都宮市と茅ヶ崎市の異なる点</p> <p>道の駅といっても46ヘクタール=460,000平方メートル（東京ドーム10個分）に広さを誇る「道の駅うつのみや ろまんちっく村」と約17,644平方メートルの道の駅ちがさきでは20倍以上も広さが異なる。また、設立場所も郊外地にある「道の駅うつのみや ろまんちっく村」と国道134線沿いの交通の要所にある道の駅ちがさきでは求められるものや課題も異なる。</p> <p>特に茅ヶ崎では渋滞の発生原因となるような事象やあまり賑わいを望んでいない近隣住民にとって「オーバーツーリズム（訪問客の著しい増加が地域住民の生活や自然環境、景観等に対して負の影響をもたらし、観光客の満足度を低下させる）」にならないよう、茅ヶ崎における道の駅のあり方を引き続き検討を重ねる必要性を感じた。</p> <p>(3) 茅ヶ崎の農家にとってのメリット作り</p> <p>「道の駅うつのみや ろまんちっく村」へ出荷する契約農家は300件ある。JAに出荷する場合もあれば、道の駅に出荷する場合もあり、競合関係ではなく、協力関係をうまく築いている。</p> <p>茅ヶ崎の場合はJAだけでなく、既に朝市などの直売も盛んであることから、どのような契約農家に道の駅の販路を活用してもらおうのか。現状を踏まえて契約農家の体制を作ることが求められると感じた。</p> <p>(4) 他市との連携について</p> <p>「道の駅うつのみや ろまんちっく村」を活用する市外顧客は、時期にもよるが日光市への観光の途中に寄るケースが多い。宇都宮市は終着点となる観光地ではなく、通過地点としてぎょうざを食べるために寄っていただくなど栃木県の広域連携を意識した広報も重要だと考えている。</p> <p>茅ヶ崎はさがみ縦貫道路（圏央道）の終点にあたり、西は小田原・箱根、東は江の島・鎌倉といった観光地の通過拠点ともいえる。その点をふまえ、広域連携を行い、市内の情報だけでなく、湘南エリア全体のハブとなるような情報発信が求められるのではないかと感じた。</p>
<p>備 考</p>	

## 6 参考資料

- (1) 本市の観光振興について（宇都宮市経済部観光交流課 提供資料）
- (2) 地方創生下における「稼ぐ地域」の仕組みづくり（ファーマーズフォレスト 提供資料）